

## コロナ禍に思う

国立病院機構仙台医療センター  
副院長  
鵜飼 克明

〈マスクごし名前も顔もいまだ分からず気持ちはいつも初登校日〉。地元夕刊のコラム（河北抄）で目にした地元の高校1年生が詠んだ短歌です。コロナ禍が私たちの社会生活に深く影響していることを感じさせます。

さて、私も〈名前も顔もいまだ分からず〉状態です。病棟に出向いた時、マスクで顔の大半を覆いつくした新人の看護師さんの区別が未だにつきません。同じような髪型で同じ制服を着ていることもあって、なおさら区別することが困難です。そもそも歳を重ねると若い人の顔の区別がつかなくなるそうです。チョコちゃんに叱られる！（2020年7月放映）によれば、認知心理学でいう「人種効果」と呼ばれる現象だそうです。確かに私たちの年代（の多く）は、例えマスクを外していたとしても、若い看護師さんの名前と顔を覚えるのが大変です。

ところで、私が〈名前も顔もいまだ分からず〉状態なのは、マスクと加齢による影響だけでしょうか？ 少し考察してみます。私が若い人の名前を覚える時は、外観だけではなく、声のトーンや話し方、身振り、そしてその人のバックグラウンド（趣味や出身など）、様々な情報を総合して覚えます。趣味が同じであったり、後輩であったりすると名前と顔がスムーズにインプットされるように思えます。それでは、これらの情報はどのようにして収集しているのでしょうか？ 立場柄、職場ではプライベートな話をワイワイとすることはできません。そこで私の場合は、いわゆる「飲み会」（注：私は下戸です）など、懇親の場を利用しています。振り返ってみれば、この1年間、歓迎会は中止となり、楽しみにしている病棟忘年会はもちろん、あらゆる職場の「楽しい」行事が中止となりました。それによって、笑顔で、もちろんマスクを外した状態で会話を楽しむ

機会、すなわち私にとっては顔と名前を覚える重要な機会がなくなってしまいました。それも相俟って〈名前も顔もいまだ分からず〉、なのだと思います。

コロナ禍によって人と人との交流の機会は減ってしまいました。医学の世界においてもそうです。例えば、去年の今頃は新型コロナの感染リスクのため多くの学会や研究会が延期や中止となり、情報は途絶えました（途絶えたように感じました）。のみならず志を同じくする友との交流も途絶えました。しかし幸いに、その状況は長くは続きませんでした。いつの頃からかwebもしくはハイブリッド方式で開催されるようになり、そして今やそれが当たり前になっています。確かにwebでは微妙なニュアンスが伝わりにくいか、空気感が伝わりにくいか、意見交換会がなくなったので腹を割って本音で話せないなど、まだまだ問題はありますが、一步一步元の状態に戻ろうとしています。このように私たちの社会は逆境や大きな困難に直面した時、一時はたじろぎますが、しかし次第にそれに適応し、そしてついにはそれを乗り越えようとレジリエンス（resilience）を発揮します。

〈ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず〉。ちょうど10年前の今日（この原稿を書いているのが奇しくも3月11日です）、あの東日本大震災の時、私の頭をよぎったのがこの一節、方丈記の冒頭です。あの時、私たちは惨状を目の前に呆然と立ち竦み、そして人の世は無常であることを改めて認識させられました。しかし立ち止まったままではありませんでした。復興を目指し一步一步前に進み、そして再び「それぞれの日常」を取り戻しました。本誌が届くのは新年度の始まりの時です。令和3年度は、コロナ時代の「新しい日常」を取り戻す一年となることでしょう。